第63歩

「麦秋とうどん店の行列」

５月中旬から６月上旬にかけて、初夏の讃岐平野を黄金色に染める麦畑。この風景が広がる季節は、収穫の秋になぞらえて「麦秋（ばくしゅう）」または「麦の秋（むぎのあき）」と呼ばれ、夏の季語にもなっています。小麦の収穫期を迎えるこの時期、高松市でもその刈り取りが最盛期を迎えます。ただし、小麦は昭和３０年代から４０年代初めには、香川県全体で年間２万トンから３万トン以上の収穫量がありましたが、平成３年以降は、１万トン以下の収穫しかなく、停滞期が続いていると言われています。最盛期に私は小学生でしたが、確かにあの頃、麦秋の時期には、田んぼが一面金色に染まり、西日がきつい夕方には、目が痛くなるほどの眩しさを感じたことを思い出します。その意味では、麦秋の輝く田園風景も見ることが少なくなった近頃ではあります。　令和６年の高松市における小麦の作付面積は６４９ヘクタールあり、そのほとんどで讃岐うどん専用に開発された小麦「さぬきの夢２００９」が栽培されています。この品種は、香川県が地元産小麦の復興を目指して生み出したもので、もちもちとした食感と豊かな風味があり、県内各地の製麺所で使用されているようです。讃岐うどんの地産地消の観点からも大きな意義を持つ動きだと歓迎したいと思います。　香川県の小麦は、米の裏作として作られるため、冬に種を撒き初夏に収穫する冬小麦であり、その金色の穂が光り輝く麦秋の期間は、それほど長くはなく、儚（はかな）さを感じるほどです。しかし、その美しい農村風景は、讃岐うどんの喉越しの良さと美味さとあいまって、讃岐うどんの未来を支え、地域の誇りとなっていく象徴だと確信しています。　そして、讃岐平野に麦秋の黄金色の美しい農業景観が広がっていくのに合わせて、瀬戸内国際芸術祭などで本県を訪れた観光客が、本場の讃岐うどんの味を楽しみに店に並ぶ行列が、ますます長くなっていくことを期待したいものです。